

# 立教大学図書館蔵「竹取物語絵巻」(小嶋菜温子氏旧蔵本) 翻刻

青木 慎一

## 【凡例】

- ・立教大学図書館が所蔵する二種の竹取物語絵巻のうち、小嶋菜温子氏旧蔵の三巻本(登録番号・上・五三〇〇三六三、中・五三〇〇三六四、下・五三〇〇三六五)を底本とする。
- ・翻刻の改行箇所、用字は底本通りとし、散らし書きについてもできる限り底本の配置を反映する。なお、煩雑になるため、誤字と思われる部分に(ママ)は記さない。
- ・判読困難な箇所は、□で示す。
- ・絵が挿入される箇所には、「**絵**」と表記する。

## 【翻刻】

### 上巻

今はむかしたけとりのおきなといふもの有けり  
野山にましりてたけをとりつ、よろつもの事  
につかひけり名をはさるきのみやつことなんいひけ  
るその竹の中にもとひかる竹なん一すちありけり  
あやしかりてよみてみるにつ、の中ひかりたり  
それを見れば三寸はかりなる人いとうつくしうて  
るたりおきな云やうわれ朝こと夕ことにみるだけ  
の中におはするにてしりぬ子になり給ふへき人な

めりとて手にうち入て家にもちてきぬめの女に  
あつてやしなはすうつくしき事かきりなし  
いとおきなければこに入てやしなふ竹とりのおき  
な竹とるに此子をみつてのちにたけ取にふしを  
へたて、よことにかねある竹をみつくる事かさ  
なりぬかくておきなやうくとゆたかになりゆく此ちこ  
やしなふほどにすくくとおほきになりまざる三月  
はかりなる程によきほとなる人になりぬればかみ  
あけなとさうしてかみあけさせきちやうのうちよ  
りも出さすいつきかしつきやしなふ程に此ちこの  
かたちのけさうなる事世になく屋のうちはくら  
きところなくひかりみちたりおきなこ、ちあし  
くくるしき時もこの子を見ればくるしき事  
もやみぬはらた、しき事もなくなきさみけり  
此子いとおほきに成ぬれば名を

みむろと

いんへの

あきたをよひて

つけさす

あきた

なよ竹の

かくや

ひめと

つけ

はへる

〔絵〕

此程三日うちあけあそふよろつのあるひをそしけるおとこはうけきはすよひつとへていとかしこくあそふ世界のおのこあてなるもいやしきもいかてこのかくやひめをえてしかなみてしかなとをとにき、めて、まとふそのあたりのかきも家のともをる人たにはやすくみるましきものをよるはやすきいもねすやみの夜にもこ、かしこよりのそきかひままとひあへりさるときよりなによはひとはいひける人の物ともせぬ所にまとひありけともなにのしるしあるへくも見えず家の人とも物をたにいはんとていひかくれともこと、もせずあたりをはなれぬ君達夜をあかし日をくらす人おほかりけるをろかなるひとはようなきありきはよしなかりけりとてこすなりにけりその中になをいひけるはいろこのみといはる、五人思ひやむときなくよるひるきたりけりその名一人はいしつくりの御子一人はくらもちの御子一人は左大臣あへのみむらし大納言一人は伴のみゆき中納言一人はいそのかみのもろたり此人々なりけり世中におほかる人をたにすこしもかたちよしと聞

てはみまほしうする人たちなりければかくやひめをみまほしうて物もくはず思ひつゝ、かの家に行てた、すみありきけれ共かひあるへくもあらす文をかきてやれとも返事もせずわひうたなどかきてつかはすれ共かひなしと思へとも霜月極月のふりこほりみな月のてりはた、くにもさはらすきたり此人々あるときは竹とりをよひ出してむすめを我にたへとふしおかみ手をすりの給へとをのかなさぬ子なれば心にもしたかへすとなんいひて月日をおくるか、れは此人々家にかへりて物を思ひいのりをしくはんを立おもひやむへくもあらすさり共つみに男あはせさらんやとは思ひてたのみをかけたなりあなち心にさしを見えありくこれを見つけておきななくやひめにいふやう御身はほとけへんけの人と申なからこれ程おほきさまてやしなひ奉る心さしをろかならすおきなの申さん事聞給ひてんやといへはかくやひめ何事をかのためはんことは承らさらむへんけの物にて侍けむ身ともしらすおやとこそおもひ奉れといふおきなうれしくもの給ふものかなといふおきなとし七十にあまりぬけふともあすともしらす此世の人は男は女にあふ事をす女は男にあふことをす其後なん門ひろくもなり侍るいかてかざる事なくてはおはせんかくや姫のいはくなんてうさる事かし侍らんといへはへんけの人といふとも女の身もち給へりおきなのあらんかきりはかうてもいませかしこの人々のとし月をへてかうのみいましつゝ、のたまふ事を思ひ定めてひとりく

にあひ給へやといへはかくやひめいはく能もあらぬかた  
ちをふかき心もしらてあた心つきなはのちくやしき  
事も有へきをとおもふはかりなり世のかしこき人なり  
ともふかきこゝろさしをしらてはあひかたしとなん  
おもふといふおきないはく思ひのことくもの給ふかなそも  
くいかやうなるこゝろさしあらん人にかあはんとおほ  
すかはかり心さしをろかならぬ人くこそあめれか  
くやひめのいはくかはかりのふかきをかみんといはん  
いさゝかの事なり人の心さしひとしかんなりいかてか中  
におとりまさりはしらん五人の中にゆかしきものを  
みせ給へらんに御心さしまさりたりとてつかうまつら  
むとそのおはすらん人々に申給へといふよき事なり  
とうけつ日くるゝほとれいのあつまりぬ人々あるひは  
ふえをふき或は哥をうたひあるひはしやうかをし  
あるひはうそをふきあふきをならしなとするにおきな  
出ていはくかたしけなくきたなけ成ところにおきな  
月をへてものし給ふ事ありかたくかしくまると  
申おきなこのちけふあすともしらぬを

かくの給ふ

君達にも

よく思ひさためて

つかうまつれと

申もこと

はりな

り

〔絵〕

いづれもとりまさりおはしまさねは御心さしの程  
はみゆへしつかうまつらん事はそれになんさたむ  
へきといへはこれ能事也人のうらみもあるましと  
いふ五人の人々も能事なりといへはおきないりて  
云かくやひめ石つくりの御子には佛の御石のはちと  
いふものありそれをとりて給へといふくらもちの御  
子には東のうみにほうらいといふ山あるなりそれにしろ  
かねをねとしこかねをくきとし白き玉をみとして  
たてる木ありそれ一えたおりてたまはらんといふ  
今ひとりにはもろこしに有火ねすみのかはきぬを給へ  
大伴の大納言にはたつのくひに五色にひかる玉ありそれ  
をとりてたまへいそのかみの中納言にはつはくらめの  
もたるこやすの貝取て給へといふおきなかたき事には  
こそあなれ此国にある物にもあらずかくかたき事をは  
いかに申さんといふかくやひめなにかかたからんといへ  
はおきなともあれかくもあれ申さんとして出てかく  
なん聞ゆるやうに見給へといへは御子たち上達部  
きゝてをいらかにあたりよりたになありきそとや  
はのたまはぬと云てうんしてみなかへりぬなを此  
女みては世にあるましき心ちのしければてんちくに  
ある物ももてこぬ物かはおもひめぐらしていしつ  
くりの御子はこゝろのしたくある人にて天ちくに二  
つとなきはちを百千里のほといきたりともいかに  
か取へきとおもひてかくや姫のもとにはけふなん天ち  
くへ石のはちとりにまかるときかせて三年はかり

大和の國とをちのこほりにある山寺にひんするのまへなるはちのひたくろにすみつきたるをとりてにしきのふくろに入てつくり花の枝につけてかくやひめの家にもてきてみせければかくやひめあやしかりてみればはちの中に文ありひろけてみればうみ山のみちにこゝろをつくしはてないしのはちの涙なかれけかくやひめひかりや有とみるにほたるはかりのひかりたになし

おくつゆのひかりをたにもやとさまし

をくらの山にてなにもとめけん

とて返し出すはちを門にすて、此哥の返しをす

しら山にあへはひかりのうする、と

はちをすて、もたのまる、かな

とよみて入たりかくやひめ返しもせずなりぬみ、

にもき、入さりければ

いひか、つらひて

かへりぬ

〔繪〕

彼はちをすて、又いひけるよりそおもなき事

をはちをすつるとは云けるくらのちの御子は

こゝろたはかり有人にておほやけにはつくしの國

にゆあみにまからんとていとま申てかくやひめの

家には玉のえたとりになんまかるといはせてくたり

給ふにつかうまつるへき人々みな難波まで御おくりし

ける御子いとしのひてとの給はせて人もあまたるて

おはしまさすちかうつかうまつるかきりして出給ひ

御おくりの人々見奉りをくりて帰りぬおはしましぬと人に見え給ひて三日はかり有てこき給ぬかねてことみな仰たりければ其時一つのたからなりけるうちたくみ六人をめし取てたはやすく人よりくましき家をつくりてかまとを三へにし籠

てたくらを入給ひつ、御子も同所にこもり給ひてしらせ給ひたる限十六そをかみにくとをあけて玉のえたをつくり給かくやひめの給ふ様にたかはすつくり出ついとかしこくたはかりてなにはにみそかにも

て出ぬ舟にのりて帰りきにけりと殿につけやりていといたくくるしかりたる様して居たまへりむかへに人おほく参たり玉のえたをはなかひつに入

て物おほひて持て参るいつか聞けんくらのちの御子はうとんくゑのはな持てのほり給へりとの、しり

けりこれをかくや姫き、て我は此御子にまけぬへしとむねつふれておもひけりかゝるほとに門をたゝきてくらのちの御子おはしたりとつく旅の御すかた

なからおはしたりといへはあひ奉る御子の給はく命を捨て彼玉のえた持てきたるとてかくやひめにみ

せ奉り給ふといへはおきな持ていりたり此たまの枝にふみそつたりける

いたつらに身はなしつとも玉のえを

たをらてさらにかへらさらまし

これをもあはれともみてをるに竹取のおきなはしり入ていはく此御子に申給ひしほうらいの玉のえ

たを一つの所をあやまたすもおはしませり何を

持てとかく申へき旅の御姿なからわか御家へもよ  
りたまはずしておはしましたりはや此御子に  
あひつかうまつり給へといふに物もいはすつらつ  
えをつきていみしくなけかしけに思ひたり此御  
子今さへ何かといふへからすと云まゝにえんにはひ  
のほり給ぬおきな理に思ふ此國にみえぬ玉の枝  
なり此度はいかてかいなひ申さん人様もよき人  
におはすなといひみたりかくや姫の云様おやの給  
ふ事をひたふるにいなひ申さんことのおしさに  
に取かたき物をかくあさましくもて来る事を  
ねたく思ひおきなはねやのうちしつらひなとすお  
きな御子に申様いかなる所より此木は候ひけんあ  
やししくるはしくめてたき物にもと申御子こ  
たへてのたまはくさおと、しの二月の十日ころに  
難波より舟にのりて海中に出てゆかんかたもし  
らす覚えしかと思ふ事ならて世中にいき何かて  
せんと思ひしかはた、むなしき風にまかせてあり  
く命しなはいか、はせん生であらんかきりかくあ  
りきてほうらいと云らん山にあふやと海にこき  
た、よひありきて我國のうちはなれてありき  
罷りしに有時はなみあれつ、うみのそこにも入ぬ  
へくあるときは風につけてしらぬ国に吹よせら  
れて鬼のやうなる物出来てころさんとしき有  
時はこしかた行すゑもしらてうみにまきれん  
とし有時にはかてつきて草のねをくひものとし  
あるときはいはんかたなくむくつけ、なるもの、き

てくひか、らんとしき有時はうみのかいをとりて  
命をつくたひのそらにたすけ給ふへき人もなき  
所にいろく、の病をして行方空も覚えすふねの  
行にまかせてうみにた、よひて五百日といふたつ  
のこく斗にうみの中にわつかに山みゆ舟の内をな  
んせめてみる海のうへにた、よへる山いとおほきにて  
ありその山のさま高くうるはし是やわかもむる山  
ならむと思ひてさすかにおそろしく覚えて山のめく  
りをさしめくらし二三日斗みありくに天人の  
よそほひしたる女山の中より出来てしろかねのこな  
まるを持って水をくみありくこれをみて舟よりおり  
てこの山の名を何とか申ととふ女こたへて云これは  
ほうらいの山なりとこたふ是を聞にうれしき事  
かきりなし此女かくのたまふは誰そととふ我名はほう  
かんるりと云てふと山の中に入ぬその山をみるにさら  
に上るへき様なし其山のそはひらをめくれは世中  
になき美の木共たてり金しろかねるりいろの水山  
よりなかれ出たるそれには色々の玉のはし渡せ  
りそのあたりにてりか、やく木共たてりその中に  
此取て持てまうてきたりしはいとわりかるし  
か共の給ひしにたかはましかほとこのはなを折て  
まうて来るなり山はかきりなく面白し世にたとふ  
へきにあらざりしかと此えたを折てしかは更  
にこ、ろもとなくて船にのりておひかせ吹て四  
百余日になんまうてきにし大願力にや難波よ

りきのふ南都に

まうてきつる

更に塩にぬれたる衣たに

ぬきかへなてなん

たちまうて

きつると

のたまへ

は

〔絵〕

おきな聞てうちなけきてよめる

くれ竹の世々のたけとり野山にも

さやはわひしきふしをのみみし

これを御子聞てこゝらの日ころ思ひわひ侍つる心

はけふなんおちぬるとのたまひて返し

わかたもとけふかはければわひしきの

千草のかすもわすられぬへし

との給ひかゝるほどに男とも六人つらねて庭に

出来一人の男ふはさみに文をはさみて申くもん

つかさのたくみあやへのうちまる申さく玉の木をつ

くりつかふまつりし事こ国をたちて千余日に力

をつくしたる事すくならず然るにろくいまた

給はらす是を給てわろきけこに給せんといひて

さ、けたる竹取のおきな此たくみらか申事は何事

そとかたふきおり御子はわれにもあらぬけしきに

てきもきえぬ給へりこれをかくやひめき、て此奉る

文をとれと云てみれば文に申けるやう御子の君千

日いやしきたくみらともろとも同所にかくれぬ給ひ

てかしこき玉のえたをつくらせ給ひてつかさもたま

はらむと仰給ひきこれを此比あんするに御つかひと

おはしますへきかくやひめのえうし給ふへきなり

けりと承て此宮よりたまはらむと申て給へき

なりといふを聞てかくやひめくる、まゝに思ひはひ

つる心地わらひさかへておきなをよひとりて云や

う誠ほうらいの木かそこそおもひつれかくあさまし

きそらことにて有ければはや返し給へといへは

おきなこたふさたかにつくらせたる物と聞つればか

へさんこといとやすしとうなつきをりかくやひめの

心ゆきはて、ありつるうたの返し

まことかと聞てみつればことの葉を

かされる玉のえたにそありける

といひて玉のえたも返しつ

竹取のおきなさはかり

かたらひつるかき

すかにおほえて

ねふり

をる

〔絵〕

御子はたつもはしたるもはしたにて居給へ

り日の暮ぬればすへり出給ひぬ彼うれへせした

くみをはかくやひめよひすへてうれしき人とも

なりといひてろくいとおほくとらせ給ふたくみら

いみしくよるこひて思ひつる様にもあるかなと云て

帰る道にてくらもちの御子ちのなかる、迄調させ給ふ

ろくえしかひもなく皆とり捨させ

給ひてければ

にけうせに

けり

### 中巻

かくて此御子一しやうのはちこれに過るはあら  
し女を得すなりぬのみにあらず天下の人のおも  
はん事のはつかしき事との給ひてた、一所ふ  
かき山へいり給ひぬ宮つかささふらふ人々みな手  
をわかちてもとめ奉れとも御死にもやし  
給ひけんえみつけたてまつらす成ぬ御子の御供に  
かくし給はんとて年ころ見え給はさりける也  
これをなむ玉さかるとは云はしめける左大臣あ  
へのみむらしはたからゆたかに家ひろき人にて  
おはしけるそのとし来りけるもろこし船のわう  
けいと云人のもとに文をかきて火ねすみのかはと  
いふなる物かひてをこせよとてつかうまつる人の中  
に心たしかなるをえらひて小野のふさもりといふ  
人をつけてつかはすもていたり彼うらになる  
わうけいに金をとらすわうけいふみをひろけ  
てみて返事かく火ねすみのかはころも此国に  
なき物也をとにはきけともいままたみぬ物なり世  
世にある物ならば此国にもまうてきなましとい  
かたきあきなひ也しかれとももし天ちくにたま  
さかにもて渡りなは若長者のあたりにとふらひ

もとめんになき物ならばつかひにそへて金をは  
返し奉らんといへりかのもろこし船きけり小野  
のふさもりまうてきてまうのほるといふ事を聞て  
あゆみとうする馬をもちてはしらせんかへさ  
せ給ふ時に馬にのりてつくしよりた、七日に  
まうて来る文をみるにはく火ねすみのかは衣  
からうして人を出してもとめ奉る

今の世にも

むかしの

世にも

此かは、たや

すくなき

物なり

けり

### 〔繪〕

むかしかしこき天ちくのひしり此国にもて渡  
りて待ける西の山寺にありとき、及て  
おほやけに申てからうしてかいとりて奉るあ  
たひの金すくなしとこくし使に申しかはわ  
うけいか物くはへてかひたり今こかね五十両給るへ  
し舟の帰らんにつけてたひをくれもしかねたま  
はぬ物ならば彼衣のしち返したへといへる事を  
みて何おほすいまかね少にこそあなれうれしくし  
ておこせたるかなとでもろこしのかたにむかひてふ  
しおかみ給ふ此かはきぬ入たるはこをみればくさく  
のうるはしきるりをいろえてつくれりかはきぬを

見ればこんしやうの色なりけのす糸にはこかねの光しき、やきたりたからとみえうるはしき事ならふへき物なし火にやけぬ事よりもけうらなる事

かきりなしうへかくやみめこのもしかり給ふにこそ有けれとのたまひてあなかしことではこに入給ひても、えたにつけて御身のけさういといたくしてやかてとまりなんものそとおほしてうたよみくはへてもちていましたりそのうたは

かきりなきおもひにやけぬかはころも

たもとかはきてけふこそはきめ

といへり家の門にもていたりてたてり竹とり出きてとり入てかくやひめに見すかくやひめのかは衣をみて云うるはしきかはなめりわきて誠のかはならんともしらす竹取こたへていはくともあれかくもあれ先しやうし入奉らん世中にみえぬかはきぬのさまなれば是をと思ひ給ひね人ないたくわひ給ひ奉らせ給ふそと云てよひすへたてまつれりかくよひすへて此度はかならずあはんと女の心にも思ひをり此おきなはかくやひめのやもめなるをなけかしければよき人にはあはせんと思ひはかれとせちにいなといふ事なればえしひぬは理也かくや姫おきなに云このかは衣は火にやかんにやけすはこそまことならめと思ひて人のいふ事にもまけめ世になき物なればそれまこと、うたかひなく思はんとの給ふ猶是をやってこゝろみんと云おきなそれさもいはれたりと云て大臣にかくなん申といふ大臣こたへて云此かは

は唐土にもなかりけるをからうして求めたつね得たる也なにのうたかひあらんさは申ともはややきて見給へといへは火の中に打くへてやかせ給ふに

めらくと

やけぬ

〔絵〕

されはこそこと物の皮なりけりといふ大臣これを見給ひてかは草の葉の色にて居給へりかくやひめはあなうれしとよろこひてあたりかのみ給ひけるうたの返しはこに入てかへす

名残なくもゆとしりせはかはころも

おもひの外にをきて見ましを

とありけるされは帰りいましにけり世の人々あへの大臣火ねすみのかは衣をもていましてかくやひめに住給ふとなこゝにいますなとふある人の云かは、火にくへてやきたりしかはめらくとやけにしかはかくやひめあひ給はすといひければこれを聞てそとけなきものをあへなしと云ける大伴のみゆきの大納言は我家にありとある人をあつめてのたまはくたつのくひに五色のひかりある玉あなりそれをとりて奉りたらん人にはねかはん事をかなへんとのたまふをのこ共仰をうけたまはりて申さく仰の事はいとまたうとし但この玉たはやすく得とらしをいはんやたつのくひの玉はいかゝとらんと申あへり大納言の給ふ天のかひといはんものは命をすて、もをのか君のおほせ事をはかなへんこそ思へけれ此国になきてんちくも

ろこしの物にもあらず此国の海山よりたつはをりのほる物也いかにおもひてかなんちらかたき物と申へきおのこ共申様さらはいか、はせんかたき物なりとも仰事にしたかひてもとめにまからんと申に大納言見わらひてなんちらか君の使と名をなかしつ君の仰事はいか、はそむくへきとの給ふたつのくひの玉とりにとて出したて給ふ此人々の道のかてくひものに殿の内のけぬわたせになとある限取出してつかはす此人々とも帰るまでいもるをしてわれはをらん此玉とりえては家に帰りくなどの給せたりをのくおほせうけたまはりて罷りぬ龍の首のたま取得すは帰りくなどの給へはいつちもくあしのむきたらんかたへいなんすかゝるすき事をし給ふ事とそしりあへりたまはせたる物をのをのわけつ、取あるひはをのか家にこもり居或はをのかゆかまほしき所へいぬ親君と申共かくつきなき事をおほせ給ふ事とことゆかぬ物ゆへ大納言をそしりあひたりかくやひめすへんにはれいやうには見にくしとのたまひてうるはしき家をつくり給ひてうるしをぬりまきゑして返し給ひて屋の上にはいとをそめて色々ふかせてうちくしのしつらひにはいふへくもあらぬあやをり物にゑをかきてまことほりたりもとのめともはかくやひめをかならずあはんまうけしてひとり明しくらし給ひ

つかはし、人はよる

ひるまち給ふに

年こゆる  
まで

をとも  
せず

〔絵〕

こゝろもとなかりていとしのひてたゝとねり二人めしつきとしてやつれたまひて難波の辺におはしましてとひ給ふ事は大伴の大納言の人や舟にのりてたつころしてそかくひのたまとねるとや聞とはするに舟人こたへていはくあやしき事かなとわらひてさるわさする船もなしとこたふるにをちなき事する舟人にもあるかなえしらくかくいふとおほしてわか弓の力はたつあらはふといころしてくひの玉はとりてんをそくくるやつはらをまたしとの給ひて舟に乗て海ことにありき給ふにいと遠くてつくしの方のうみにこき出給ぬいか、しけんはやき風吹世界くらかりて舟をふきもてありくいづれの方ともしらす舟を海中にまかり入ぬへくふきまはして波はふねにうちかけつ、まき入神はおちかゝるやうにひらめきかゝるに大納言はまことひてまたかゝるわひしきめみすいかならんとするそとの給ふかち取こたへて申こら舟にのりてまかりありくにまたかゝるわひしき目をみすみ舟海のそこにいらすは神をちかゝりぬへしもしさいはいに神のたすけあらは南海にふかれおはしぬへしうたて有主のみもとにつかうまつりてすゝろなる

しにをすへかめるかなと梶取なく大納言これを聞  
ての給はくふねにのりてはかちとりの申事をこ

そ高き山とたのめなとかくたのもしけなく申

そとあをへとをつきての給ふかちとりこたへて

申神ならねは何わさをかつかうまつらんかせふき

波はけしけれとも神さへいた、きにおちかゝるやう

なるは龍をころさんととも給候へはある也はやて

もりうのふかする也はや神に祈り給へと云能事な

りとてかちとりの御神きこしめせ音なく心をさなく

龍をころさんと思ひけり今より後は毛一すちをたに

うこかし奉らしとよことをはなちて立ぬなくくよ

はひ給ふ事千度はかり申給ふけにやあらんやう

やう神なりやみぬ少ひかりて風は猶はやく吹梶取

のいはく是は龍のしわざにこそ有けれ此ふく風は

よき方の風也あしき方のかせにはあらず能方に越て

ふく也といへとも大納言はこれを聞入給はず三四日

ふきてふきかへしよせたりはまをみればはりまの

あかしのはまなりけり大納言南海のはまにふきよせ

られたるにやあらんと思ひていきつきふし給へり

舟にあるをのことも国につけたれとも国のつかさ

まうてとふらふにもえおきあかり給はて舟そここに

ふし給へり松原に御むしろしきておろし奉る其

時にそ南海にあらさりけりと思ひてからうして

おきあかり給へるを見れば

かせいとおもき人にてはら

いとふくれこなた

かなたの目には

すも、を二つけ

たる様也

〔絵〕

是を見奉りてそ其国のつかさもほ、えみたる国に

おほせ給ふてたこしつくらせ給ひてにやうくにな

はれて家に入給ひぬるをいかてか聞けんつかはし、お

のことも参りて申様たつの首の玉をえとらさりし

かは南殿へもえ参らさりし玉のとりかたかりし事

をしり給へればなんかんとうあらしとて参りつると申

大納言おき出たたまはくなんちらくもてこそす

なりぬ龍はなる神のるいにこそありけれそれか玉を

とらむとてそこらの人々のかいせられんとしけりまし

て龍をとらへたらましかは又こともなく我はかいせ

られなましよくとらへす成にけりかくや姫てふおほ

盗人のやつか人をころさんとするなりけり家のあ

たりたに今はとをらし男共もなありきそとて家

に少のこりたりける物共はたつの玉をとらぬ者

ともにたひつ是を聞てはなれ給ひしもの上はかた

はらいたくわらひ給ふいとをふかせつくりし屋は

とひからすのすにみなくひもていにけり世界の人

の云けるは大伴の大納言はたつの首の玉とりておはし

たるいなさもあらず御まなこ二にすも、のやうなる玉

をそそへていましたるといひければあなたへかたと

いひけるよりも世にあはぬ事をはあなたへかたと

はいひはしめける中納言いそのかみのまろたりの家に

つかはるゝをのこ共のもとにつはくらめのすくひた  
らはつけよとの給ふをうけ給りてなにの用にか  
あらんと申こたへての給ふやうつはくらめのもたる  
こやす貝をとらんれうなりとの給ふをのこもこた  
へて申つはくらめをあまたころしてみるたにもは  
らになきものなりたゝし子うむ時なんいかてかいたすら  
むと申人たにみれはうせぬと申又人の申やうおほ  
いつかさのいひかしく屋のむねにつくのあなことに  
つはくらめはすをくひ侍るそれにまめならんをのこも  
おひて罷りてあくらをゆひあけてうかゝはせんにそこ  
らのつはくらめ子うまさらんやは扱こそとらしめたま  
はめと申中納言よろこひ給ひておかしき事にもある  
かなもつともえしらすりけりけう有事申たりと  
の給ひてまめなるおのこも廿人はかりつかはして  
あなゝひにあけすへられたり殿より使ひまなく給は  
せてこやすのかひとりたるかとむかはせ給ふつはく  
らめもひとのあまたのほりあたるにおちてすにもの  
ほりこすかゝるよしの返事を申ければ聞給ひてい  
かゝすへきとおほしわつらふに彼つかさの官人くらつ丸と  
申おきな申やうこやす貝とらんとおほしめさはた  
はかり申さんとして御前にまいりたれば中納言ひた  
ひをあはせてむかひ給へりくらつまるか申やうこの  
つはくらめこやす貝はあしくたはかりてとらせ給ふ也  
さてはえとらせ給はしあなくひにおとろしく廿人  
上りて侍ればあれまうてこす也せさせたまふへき  
やうは此あなゝひをこほちて人みなしりそきてまめなら

む人老人をあらたにのせすへてつなをかまへて鳥の子  
うまん間につなをつりあけさせてふとこやすかひを  
とらせ給ひなはよかるへきと申中納言の給ふよう  
いとよき事なりとてあなゝひをこほし人みなかへりま  
うてきぬ中納言くらつ丸にの給はくつはくらめはいかなる  
ときにか子をうむとしりて人をはあくへきとの給ふ  
くらつ丸申様つはくらめ子うまんとする時は尾をさゝ  
けて七度めぐりてなんうみおとすめる扱七度めぐらん  
おりひきあけてそのおりこやすかひはとらせ給へと申中  
納言よろこひ給て万の人にもしらせ給はてみそかに  
つかさにいましてをのこ共の中にましりてよるを  
ひるになしてとらしめ給ふくらつ丸かく申をいといた  
くよろこひてのたまふこゝにつかはるゝ人にもなきに  
ねかひをかなふる事のうれしさとの給ひて御そぬき  
てかつけ給ふつさらによさり此つかさにまうてことの  
給ふてつかはしつ日暮ぬれはかのつかさにおはし  
て見給ふに誠つはくらめすつくれりくらつ丸  
申やうおうけてめくるあらこに人をのほせてつり  
あけさせてつはくらめのすに手を指入させてさくる  
に物もなしと申に中納言あしくさくれはなき也と  
はらたちてたればかりおほえんにとて我のほりて  
さくらんとの給ひてこにのりてつられ上りてう  
かゝひ給へるにつはくらめをゝさけていたくめくるに  
あはせて手をさゝけてさくり給ふに手にひらめる  
物さはる時に我物にきりたり今はおろしてよおきな  
しえたりとの給ひてあつまりてとくおろさんとて

つなをひき過してつなたゆる則にやしまのかなへ  
のうへのけさまにおち給へり人々あさましかりて  
よりてか、へ奉れり御目はしらめてふし給へり人  
人水をすくひ入奉るからうしていき出給へるに又か  
なへの上より手とり足とりしてさけおろし奉るから  
うして御こ、ちはいか、おほざる、ととへはいきの下に  
て物は少覚ゆれとこしなうとかれぬされとこやす  
貝をふとにきりもたれはうれしくおほゆる也まつ  
しそくしてこ、のかいかほみんと御くしもたけて御手を  
ひろけ給へるにつはくらめのまりおけるふるくそを  
にきり給へるなりけりそれを見給ひてあなかひ  
なのわざやとのたまひけるよりそ思ふにたかふ事  
をはかひなしといひけるかひにもあらずと見給ひけ  
るに御心地もたかひてからひつのふたに

入られ給ふへくも

あらず

御腰は

おれに

けり

〔絵〕

中納言はいくいけたるわざしてやむことを人に  
きかせしとし給ひけれとそれをやまひにていと  
よはくなり給ひにけりかひをえとらすなりにけるよ  
りも人の聞わらはん事を日にそへておもひ給ひけ  
れはた、にやみしぬるよりも人き、はつかしく覚  
え給ふなりけりこれをかくやひめ聞てとふらひに

やる哥

としをへて波たちよらぬすみの江の

まつかひなしときくはまことか

とあるをよみてきかすいとよはき心にかしらもたけ  
て人にかみをもたせてくるしき心ちにからうして  
かき給ふ

かひはかくありける物をわひはて、

しぬるいのちをすくひやはせぬ

と書はつるたえ人給ひぬ是を聞てかくや姫少  
あはれとおほしけりそれよりなん少うれしき  
事をはかひありとは云ける扱かくやひめかたち  
の世に似すめてたき事をみかど聞しめして内  
侍なかとみのふさこにの給おほくの人の身をいたつ  
らになしてあはさるかくや姫はいかばかりの女そ  
とまかりてみてまいれとの給ふふさこ承てまかれ  
りたけとりの家に畏りてしやうしいれてあへり  
女に内侍の給ひ仰事にかくやひめのうちいうにおはす  
なり能見てまいるへきよしの給はせつるになん参り  
つるといへはさらはかく申侍らんといひて入ぬかくやひ  
めにはやかの御使にたいめんし給へといへはかくやひめ  
よきかたちにもあらずいかてかみゆへきといへはうたても  
のたまふかな御門の御使をはいかてかをろかにせん  
といへはかくやひめのこたふるやう御門のめしてのた  
まはん事かしこし共おもはずといひてさらにみゆ  
へくもあらずむめる子のやうにあれといと心はつ  
かしげにをろそかなるやうにいひければこ、ろの

まゝにもえせめすないしのもとに帰り出て口をしくこのおさなきものはこはく侍る者にてたいめんすましきと申ないしかならず見奉りてまいれと

仰こと有つる物を

見奉らては

いかてか帰り

参らん

### 下巻

国王の仰事をまさに世に住たまはん人の承たまはてありなんやいはれぬことなし給ひそことはちしくいひければこれを聞てましてかくやひめ聞へくもあらず国王の仰事をそむかははやころし給てよかしといふ此内侍かへり参りて此由をそうす御門きこしめしておほくの人ころしてける心そかしとのたまひてやみにけれとなをおほしおほしましてこの女のたはかりにやまけんとおほしておほせ給ふ汝かもちて侍るかくやひめ奉れかほかたちよしときこしめして御つかひたひしかとかひなくみえず成にけりかくたひくしくやはならはずへきと仰らるゝおきなかしこまりて御返事申やう此めのわらはゝたへてみやつかへつかうまつるへくもあらず侍るをもてわつらひ侍ざりともまかりておほせたまはんとそうすこれをしこしめしておほせ給ふなとかおきなのおほしたてたらん物をこゝろにまかせざらん此女もしたてまつりたるものならはおきなにかうむ

りをなとか

たまはせ

さらん

おきなよろ

こひて

家にかへりて

かくや姫に

かたらふ

やうかく

なん

御門の

仰たまへる

なをやは

つかう

まつりたま

はぬと

いへは

### 〔絵〕

かくや姫こたへて云もはらさやうのみやつかへつかうまつらしとおもふをしめてつかうまつらせ給はゝきえうせなんすみつかさかうふり仕てしぬはかり也おきないらふる様なし給ひそかうふりもわか子を見奉らては何にかせんさは有共なとか宮つかへをし給はさらん死給ふへきやうや有へきといふなをそらことかつかまつらせてしなすやあるとみたまへあまたの人のこゝろさしをろ

かならざりしをむなしくなしてしこそあれきのふ  
けふみかとのたまはん事につかん人き、やさし  
といへはおきなこたへて云天下の事はとありともか  
かりとも御命のあやうきこそおほきなるさはりなれ  
は猶つかうまつるましき事を参りて申さんとて  
まいりて申やうおほせの事をかしこさに彼わらはを  
まいらせんとてつかうまつればみやつかへに出し  
たておはしぬへしと申みやつこ丸か手にうませた  
る子にてもあらずむかし山にてみ付たるかかれは  
心はせも世の人に似す待るとそうせさす御門おほせ  
給はくみやつこまろか家は山もとちかく也御かりみゆ  
きし給はん様にてみてんやとの給はすみやつこ丸か申  
やういと能事也何か心もなく侍らんになとみゆき  
して御覽せられなんとそうすれば御門俄に日  
を定て御かりに出給ふてかくや姫の家に入給ふて  
見給ふにひかりみちてけうらにてるたる人有是な□  
むとおほしてにけて入袖をとらへ給へはおもてをふた  
きて候へとはしめよく御覽しつればたくひなくめて  
たく覚えさせ給ふてゆるさしとすとてゐておはしまさ  
むとするにかくやひめこたへてそうすのか身は此国  
に生て侍らはこそつかひ給はめいとゐておはしまし難  
くや侍らんとそうす御門などかさあらんなをあてお  
はしまさんとて御こしをよせ給ふに此かくやひめきとか  
けに成ぬはかなくくちをしとおほしてけにた、人に  
はあらざりけりとおほしてさらは御ともにはあてい  
かしもとの御かたちとなり給ひねそれを見てに

帰りなんと仰られるはかくや姫もとのかたちに成ぬ  
御門なをめてたくおほしめさる、事せきとめかたし  
かくみせつる宮つこ丸をよろこひ給ふさて仕まつる  
百くはん人々あるしいかめしうつかうまかるみかとかく  
やひめをと、めて帰り給はん事をあかす口をしく  
おほしけれと玉しゐをと、めたるこ、地してなんかへ  
らせ給ひける御こしに奉て後にかくや姫に

帰るさのみゆき物うくおもほえて

そむきてとまるかくやひめゆへ

御返事

むくらはふ下にも

としはへぬる

身の

なにかは玉の

うてなをも

みん

〔絵〕

これを御門御らんしていか、帰り給はんそら  
もなくおほさる御こ、ろはさらにたち帰るへくも  
おほされざりけれとざりとて夜をあかし給ふへ  
きにあらねはかへらせ給ひぬつねにつかうまつる  
人を見給ふにかくやひめのかたはらによるへくたに  
あらざりけりこと人よりはけうらなりとおほし  
ける人のかれにおほし合すれば人にもあらずかく  
やひめのみ御心にかゝりてた、ひとり過し給ふよし  
なく御かたゝにも渡り給はすかくや姫の御もとにそ

御ふみをかきてかよはさせ給ふ御かへりさすかになに  
くからずきこえかはし給ひて面白く本草に付て  
も御歌をよみてつかはすかやうにて御心をたかひ  
になくさめ給ふ程に三年はかりありて春のはしめ  
よりかくやひめ月のおもしろう出たるをみてつねよ  
りも物思ひたる様もある人の月かほみるはいむ事と  
せいしけれ共ともすれは人まにも月をみてはいみ  
しこくなき給ふ七月十五日の月に出みてせちにも  
おもへるけしき也ちかくつかはるゝ人々竹とりのお  
きなにつけて云かくやひめれいも月をあはれか  
り給へとも此ころとなりてはたゝ事にも侍ら  
さめりいみしくおほしなげく事有へしよくく  
見奉らせ給へといふを聞てかくやひめに云やう  
なんてうこゝ地すれはかく物を思ひたるやうにて  
月を見給ふそうましき世にと云かくやひめみれ  
はせけん心ほそくあはれに侍るなてう物をかな  
けき侍るへきと云かくやひめの有所にいたりて  
みれは猶物思へるけしき也是をみて有佛何事  
おもひ給ふそおほすらん事なにとそといへは思ふ  
事もなし物なんこゝろほそくおほゆるといへはお  
きな月な見給ふそ是をみ給へは物をほすけしきは  
有そといへはいかて月をみてはあらんとて猶月出れ  
は出居つゝなけき思へり夕やみには物思はぬけしき  
なり月の程に成ぬれはなを時々は打なけきなどす  
これをつかふものともなを物おほす事有へしと  
さゝやけとおやをはしめて何事ともしらす八月

十五日はかりの月に出居てかくやひめいと

いたくなき給ふ

人目も今は

つゝみ給はす

なき給ふ

〔繪〕

是をみて親共も何事そととひさはくかくや姫  
なくく云先々も申さんと思ひしかともかならず  
こゝろまとはし給はんものそと思ひて今迄過し  
侍りつる也さのみやはとて打出侍りぬるそをのか身  
は此国の人にもあらずつきの都の人也それをなんむ  
かしのちきり有けるによりなむ此世界にはまうてき  
たりける今はかへるへきに成にければ此月の十五日に  
彼もとの国よりむかへに人々まうてこんすさらす罷  
ぬへければおほしなげかかなしき事を此春より  
思ひなけき侍るなりといひていみしくなくをおきな  
こはなてう事をの給ふそ竹の中よりみつつけこえ  
たりしかとなたねの大きさをおはせしをわかたけた  
ちならふまてやしなひ奉りたるわか子を何人かむかへ聞  
えんまさにゆるさんやと云て我こそしなめとてなき  
のゝしる事いとたへかたけかくやひめ云月のみやこの  
人にて父母ありかた時の問とてかの国よりまうてこし  
かともかく此国にはあまた年をへぬるになん有ける彼  
国の父母の事も覚えすこゝにはかく久敷あそひきこえ  
てならひ奉れりいみしからん心地もせすかなしくのみ  
あるされとをのか心ならず罷りなるとするといひても

ろともにいみしうなくつかはるゝ人も年比ならひて  
たちわかれなん事を心はへなとあてやかにうつく  
しかりつることをみならひてこひしからん事のたへかた  
くゆ水のまれす同し心になけかしかりけりこの事  
を御門きこしめして竹取か家に御使つかはさせ給ふ  
御つかひに竹取出あひてなく事限なし此事をなけく  
にひけもしろくこしもか、まり目もた、れにけりお  
きな今年は五十はかりなりけれとも物思ひにはかたと  
きになん老になりけりとみゆ御つかひおほせ事と  
ておきなに云いと心くるしく物思ふ成は誠にかと仰  
たまふ竹取なく／＼申此十五日になん月の都よりかく  
や姫のむかへにまうてくなるたうとくとはせ給ふ此十  
五日には人々給はりて月の都の人まうてこはとらへさせ  
むと申御使降り参りておきな有様申てそうしつる  
事共申を聞召ての給ふ一目見給ひし御心にたに忘  
れ給はぬに明暮みなれたるかくや姫をやりていか、思ふ  
へさかの十五日つかさ／＼におほせてちよくし少将高野の  
おほくと云人をさして六糸のつかさ合て二千人の  
人を竹取か家につかはす家に罷てつみ地の上に千人  
屋の上に千人家の人々おほかりけるに合てあけるひま  
もなくまもらす此まもる人々も弓矢をたいしてたもや  
の内には女ともはんにおりて守らす女ぬりこめのうち  
かくや姫をいたかへておりおきなもぬりこめの戸さし  
てとくちにおりおきな云かはかり守る所に天の人  
にもまけんやといひて屋のうへにおる人々にはく露も  
物そらにかけらはふといころし給へ守る人々の云かはか

りしてまもる所にかはり一たにあらはまついころして  
外にさらさんと思ひ待るといふおきなこれを聞てたのも  
しかりおり是を聞てかくや姫はさしこめて守りた、  
かふへきしたくみをしたり共あの国の人をえた、かはぬな  
り弓矢していられしかくさしこめて有共彼国の人こ  
はみなあきなんとす相た、かはんとすとも彼国の人き  
なはたけき心つかう人もよもあらしおきな云様御むかへ  
にこん人をは長きつめしてまなこをつかみつふさんさ  
かしみをとりにてかなくおとさんさかしりをかき出てこ、  
らのおほやけ人にみせて恥をみせんとはらたちをる  
かくや姫いはくこはたかになのたまひそ屋の上におる人  
共のきくにいとまきなしいますかりつる心さしともを思  
ひもしらて罷なんする事の口をしう侍りけるななき  
ちきりのなかりければ

ほとなく罷ぬへきなめりと

おもひかなしく

侍る也

〔絵〕

親達のかへりみをいさ、かたにもつかうまつらてまから  
む道もやすくもあるましきに日比も出ぬてことし  
はかりのいとまを申つれとさらにゆるされぬにより  
てなんかく思ひなけき侍る御心をのみまとはしてさ  
りなん事のかなしくたえかたく侍也かの都の人はい  
とけうらにおひをせずなん思ふ事もなく侍るなりさ  
る所へまからんすもいみしく侍らす老をとろへ給  
へるさまを見奉らさん事こひしからめといひてお

きなむねいたき事なし給ふそうるはしきすかたしたる使にもさはらしとねたみおりかゝるほとによひ打過てねのこく斗に家のあたりひるのあかさにもすきてひかりたりもち月のあかさを十あはせたるはかりにて有人の毛のあなさへみゆるほと也大空より人雲にのりておりきて土より五尺はかりあかりたるほとにたちつらねたり内外なる人のこゝろとも物におそはるゝやうにて相たゝかはん心もなかりけりからうしておもひおこして弓矢をとりたてんとすれ共手に力もなくなりてなへかゝりたる中に心さかしきものねんしていとすれ共ほかさまへいきければあれもたかかはて心地たゝしれにされてまもりあへりたてる人共はさうそくのきよなる事物にも似すとふ車一くしたりらかいさしたり其中に王とおほしき人宮つこまろ家にまうてこといふにたけく思ひつるみやつこまろも物にゑひたるこゝちしてうつふしにふせりいはく汝おさなき人いさゝか成くとくをおきなつくりけるによりて汝かたすけにとてかたときの程とてくたしゝをそこの年比そこのかね給ひて身をかへたるかことくなりにけりかくやひめはつみをつくり給へりければかくいやしきをのれかもとにしはしおはしつるなりつみのかきりはてぬれはかくむかふるおきなはなきなくあたはぬ事也はや返し奉れといふおきなこたへて申かくやひめをやしなひたてまつる事廿余年に成ぬかた時との給ふにあやしく成侍りぬ又こと所にかくや姫と申人そおはしますらむと云こゝにおはするかくやひめは

おもき病をし給へはえ出おはしますましと申せはその返事はなくて屋の上にとふ車をよせていさかくや姫きたなき所にかてか久敷おはせんといひたてこめたる所の戸則たゝあきぬかうしともゝ人はなくしてあきぬ女いたきてゐたるかくやひめとに出ぬえとゝむましければたゝさしあふきてなきおり竹とり心まとひてなきふせる所によりてかくやひめいふこゝにも心にもあらてかくまかるにのほらむをたにみをくり給へといへとも何しにかなしきに見をくり奉らん我をいかにせよとてすてゝはのほり給ふそくしてゐておはせねとなきてふせれば御心まとひぬ文を書置てまからんこひしからん折々取出て見給へとて打なきて書ことは、此国に生れぬるとならはなげかせ奉らぬほとまて侍らて過わかれぬる事返すくゝほゐなくこそ覚侍れぬきおく衣をかた見と見給へ月の出たらん夜はみをこせ給へ見捨奉りてまかるそらよりも落ぬへき心ちすると書をく天人の中にもたせたるはこ有あまの羽衣いれり又あるは不死のくすり入りひとり天人云つほなる御くすり奉れきたなき所の物きこしめしたれは御心地あしからん物そとでもてよりたれはいさゝかなめ給ひて少かたみとてぬき置ころもにつゝまんとすれはある天人つゝませす御そをとり出してきせんとすその時にかくやひめしはしまてといひきぬきせつる人は心ことに成なりといふもの一こといひ置へき事ありけりと云て文かく天人をそしと心もとなかり給ひかくや姫物しらぬ事なの給ひそとていみ

しくしつかにおほやけに御文奉り給ふあはてぬさま也  
かくあまたの人を給ひてと、めさせ給へとゆるさぬむ  
かへまうてきてとりいて罷ぬれば口をしくかなしき  
事宮つかへつかうまつらすなりぬるもかくわつらはし  
き身にて侍れば心得すおほしめされつらめとも心つ  
よく承はらすなりにし事なめけなるものに思召と  
とめられぬるなん心にとまり侍りぬとて

いまはとてあまの羽ころもきるをりそ

君をころもおもひいてる

とてつほのくすりそへて頭中將をよひらせて奉ら  
す中將に天人とりてつたふ中將とりつればふとあま  
の羽ころも打きせれりつれはおきなをいとをしかなし  
とおほしつる事もうせぬ此きぬきつる人は物思ひな  
くなりければ車にのりて百人はかり天人  
くして上りぬ其後おきな女ちのなみたをなかせ  
まとへとかひなしあの書をきし文をよみてきかせ  
けれと何せんにか命もおしからんたかためにか何

事もようもなしとて

くすりもくはす

やかておき

もあからて

やみふ

せり

〔絵〕

中將人々ひきくして帰りまいりてかくやひめを  
えた、かひと、めす成ぬるをこま／＼とそうすくすり

のつほに御ふみそへて参らすひろけて御覽して  
いとあはれからせ給ひて物も聞しめさす御あそひなど  
もなかりけり大臣上達部をめしていづれの山か天に  
ちかきとはせ給ふにある人そうすするかか國に有な  
る山なん此都もちかく天もちかく侍るとそうす是を  
きかせ給ひて

あふこともなみたにうかふわか身には

しなぬくすりもなに、かはせん

かの奉る不死のくすりに文つほくして御使に給はす  
ちよくしには月のいはかさといふ人を召てするかの  
國にあなる山のいた、きにもてつくへき由仰給  
ふみねにてすへきやうをしへさせ給ふ御ふみふし  
のくすりのつほならへて火をつけてもやすへき  
よし仰給ふそのよし承て兵者もあまたくして  
山へのほりけるよりなんその山をふしの山とは名

付けるそのけふりいまた

雲の中へたちのほる

とそいひつたへ

たる

(あおき しんいち 立教大学兼任講師、日本学研究所研究員)